

令和6年度実績・令和7年度計画評価シート

【目標1】多様な担い手や労働力の確保

1 新規就農に関する相談及び支援・指導体制の整備

事項	取組	現状及び課題	令和6年度目標	令和6年度計画	令和6年度実績	評価	令和7年度計画	令和7年度目標
1 農起業支援ステーションによる就農相談の実施	農起業支援ステーションへ県域で対応する就農相談窓口を設置して、効率的で効果的な就農への誘導を図ります。（就農企画科）	農起業支援ステーションが設置され、3年間で750人以上の相談者に対応した。就農希望者の就農意欲を図り、適切な就農地や栽培品目の決定へ誘導する必要がある。	就農相談者数250人以上	・就農説明会での就農支援体制の紹介と農業理解促進を図る企画の継続 ・就農相談（対面・リモート）の実施 ・相談者が自ら就農について考えられるチェックリストの作成 ・就農候補地を検討する際の参考となる資料の整備	・相談対応件数は、個人292人（延べ454件、企業参入25社（延べ36件））。 ・就農説明会を月2回実施した（301人参加）。 ・就農への理解を深めるため、一部の回では、JA等産地の研修受入体制の紹介や先輩農家の体験発表、農業見学の時間を設け、特に先輩農家の体験発表の機会を増やした。 ・相談者が自ら就農について考えるためのチェックリストのたたき台を作成し、今後の活用に向け次年度県域で試行運用することになった。 ・県内市町村の支援体制を調査し、就農相談時に使える参考資料を整備した。（7月）	A	・就農説明会での就農支援体制の紹介と農業理解促進を図る企画の継続 ・就農相談（対面・リモート）の実施	・就農相談者数250人以上
2 円滑な就農に向けた研修等への誘導支援		相談者により考え方や就農までのハードルが異なることから、担い手担当職員には、相談者のレベルに応じた対応が求められる。	・全普及課を対象とした就農相談担当者養成研修会の開催	・相談者を支援センターへ対応を移行するまでの助言 ・普及課の担い手担当職員に対する対応力強化を目的とした研修	・技術体系化促進会議においてステーションとセンターの連携について意見交換を行い、相談の円滑な引継ぎについて助言した。（4/26、10/24、12/20） ・普及指導員研修（就農相談担当者育成研修）を実施し、農地法や国の支援制度（経営発展支援事業に対する理解）を深めた。また、日頃の相談業務の問題点を出し合い、解決策を情報交換した。（4/16、5/31）	A	・相談者が自ら就農について考えられるチェックリストの作成	・チェックリストを作成して活用

事項	取 組	現状及び課題	令和6年度 目標	令和6年度計画	令和6年度実績	評価	令和7年度計画	令和7年度 目標
3 新規就農者情報の共有・活用による担い手の確保	就農相談後、新規就農に至った者の就農時や就農後のデータを蓄積することにより効率的・効果的な担い手確保対策に活かします。 (就農企画科)	就農相談情報を速やかに共有することが求められている。	・データベースを改良し運用	・県のデータベースを効果的に共有するための様式の検討 ・管理体制の検討	・国から使用を求められている就農相談カルテに準じて就農相談報告書及び県のデータベースを改善し、運用を開始した。(5月) ・相談で得た情報の関係機関への提供に係る標準処理期間を新たに設け就農相談マニュアルに位置づけた。 なお、個人情報の取扱いについては、技術体系化促進会議で周知した。(4/26、12/20)	A	・就農説明会での先輩農家体験発表の企画と農業理解促進を図る動画の作成及び活用	・動画の作成 3本

2 意欲の高い学生等の確保に向けた魅力ある学校づくり

事項	取 組	現状及び課題	令和6年度 目標	令和6年度計画	令和6年度実績	評価	令和7年度計画	令和7年度 目標
1 県民や 地域に開 かれた学 校づくり	実習販売、農大祭を通じた学生等による地域住民との交流を推進します。 (学務科、農学科)	令和5年度農大祭の来場者は2,500人で昨年度より大幅に増加した。専攻販売、食品バザーのほか専攻展示室やキャンパスツアーなど問題なく適切に実施できた。来場者アンケートの意見も95%が高評価であった。	・学生主体による農大祭の運営及び企画の実施	・学生会と連携し農大祭のPRの実施。協賛団体への学生からのアプローチの継続 ・農大祭の企画を工夫し、地域住民との交流を推進する内容の充実強化	・農大祭協賛団体や企業等に対し、学生による訪問や電話により、協力を要請した。団体等の相手方からは、学生による直接のアプローチは積極的で好評であった。 ・学生による農大キャンパスツアーは、幅広い年齢層で定員を超える参加があり、高評価であった。 ・来場者は対前年度16%増加の2,900人であった。来場者アンケート意見は90%が高評価であった。	A	・学生会と連携し農大祭のPRの実施。協賛団体への学生からのアプローチの継続 ・農大祭の企画を工夫し、地域住民との交流を推進する内容の充実強化	・来場者アンケートによる満足度80%以上
	県民公開講座等を通じた子供たちや県民の農業や農大への理解を促進します。 (企画研修部)	県民公開講座は例年受講希望者が多いが昨年度は周知・受付方法を変更したため参加人数は定員の半分だった。 小学児童や幼稚園児等に、体験学習の機会を提供しているが、昨年度天候を理由に中止した例があった。 農業、農大への関心を高めることを目的として、中学生徒の職場体験実習を受け入れた。	・来校者数500人	・県民公開講座の告知・周知方法の検討 ・体験学習の雨天時の代替実施方法の検討 ・職場体験・見学等の受け入れの実施	・来校者数は503名であった。内訳は ①農業体験学習は、雨天等による予備日を設定して計画し、幼稚園1園395人。特別支援学校1校35人、岡崎高等技術専門校1校8人が来校した。岡崎特別支援学校小学部6名については、県内で鳥インフルエンザが発生したため、中止とした。 ②みあい特別支援学校高等部が7回、延べ28人来校し、農作業を体験した(9/20, 27, 10/4, 11/8, 11/29, 12/6, 12/13)。 ③県民公開講座「家庭で栽培する果樹、剪定の基本は、電子申請システム等による申込が43名あり、37名が出席した。	A	・県民公開講座の周知方法の検討 ・農業体験学習の企画・実施 ・作業体験等の実施方法の検討及び実施	・県民公開講座、農業体験学習の実施7回

事項	取 組	現状及び課題	令和6年度 目標	令和6年度計画	令和6年度実績	評価	令和7年度計画	令和7年度 目標
2 情報発信の強化	オープンキャンパス等の充実強化により、高校生の農大の見学・学生との交流を促進します。（学務科）	令和5年度はオープンキャンパスを夏季休暇前に2回、休暇中に3回開催し、390人の参加があった。在校生との交流や寮食事体験などの取組は好評であった。	・オープンキャンパスの参加人数 300人	・オープンキャンパスを5回以上開催 ・開催案内チラシなるべく早期に作成し、他県の農業高校にも配布するなど広く周知 ・開催にあたっては、在校生による交流、農場見学や体験等により、学校生活をより具体的にわかりやすく感じてもらうなど内容の充実	・計画どおり5回開催し、参加者は344人で、内訳は学生218人、保護等126人であった。 ・広く周知するため、開催案内チラシを全国の農業高校に配布した結果、東海3県以外の遠方（10都府県）から参加があった。 ・果樹、養鶏、養豚専攻では独自に動画を作成しており、それを専攻紹介として放映したが、わかりやすいと好評であった。 ・在校生による交流、農場見学や寮食事体験を行い、学生と直接対話ができ、農大の魅力がわかったと好評であった。 ・オープンキャンパスに参加した現役高3生の高校へ後日訪問し、受験の意思確認やPRを行った。	A	・オープンキャンパスを5回以上開催 ・開催案内チラシなるべく早期に作成し、他県の農業高校にも配布するなど広く周知 ・開催にあたっては、在校生による交流、農場見学や体験等により、学校生活をより具体的にわかりやすく感じてもらうなど内容の充実	・オープンキャンパスの参加人数 300人
	農大だよりなど広報誌作成やマスコミへの情報発信など広報活動を充実強化します。（企画研修部、教育部）	広報委員会での年間の広報計画を作成し、広報活動を行っている。農大の最新情報と魅力を発信するためにインターネット、紙媒体、マスコミ等各方面への情報発信を強化していく必要がある。	・広報計画の作成 ・マスコミへの情報発信回数 5回/年	・広報委員会での年間広報計画の作成 ・新聞等マスコミへの情報発信の強化 ・農大だより等定期発行の広報資料の充実	・4月に第1回会議を開催し、前年度の広報実績及び今年度の広報計画について協議し、印刷物、HPとSNS、イベント等の年間広報スケジュールを作成した。 ・日本農業新聞に4件の記事を執筆した。また、農福連携支援研修の開催、AICHI×TECH業業を活用した就農支援ポータルサイトの試行運用について掲載された。 ・中日新聞に農業者育成支援研修募集について掲載された。 ・新規就農相談のWEBページはAICHI×TECH業業を活用し、就農支援ポータルサイトの構築及びバーチャル農業体験システムを試行運用した（11/14～12/4）。	A	・広報委員会での年間広報計画の作成 ・新聞等マスコミへの情報発信の強化 ・農大だより等定期発行の広報資料の充実	・マスコミへの情報発信回数 5回/年
	インターネット等SNSを通じた学生等参加による学校紹介を促進します。（企画研修部、教育部）	SNS（Instagram、X）は情報発信の重要なツールになっており、魅力ある投稿でフォロワーを確保していくことが重要である。 Webサイトは動画の活用で情報発信を強化していくことが重要である。	・SNS情報発信年間200件 ・Webサイトでの動画の運用	・学生及び職員によるSNSによる継続した情報発信 ・魅力ある投稿でフォロワーを確保 ・Webサイトでの動画の運用	・広報委員会でSNSによる積極的な情報発信の継続を確認した。 ・SNSを通じた情報発信はInstagram 119件、X（旧Twitter）84件、Youtube 1件で計204件の発信ができた。 ・フォロワー数はインスタ1,507人、X 338人であった。 ・AXT事業において、就農支援ポータルサイトでの農業者紹介動画を試行運用した。	A	・学生及び職員によるSNSによる継続した情報発信 ・魅力ある投稿でフォロワーを確保 ・Webサイト等での動画の運用	・SNS情報発信年間 200件

事項	取 組	現状及び課題	令和6年度 目標	令和6年度計画	令和6年度実績	評価	令和7年度計画	令和7年度 目標
2 情報発信の強化 (続き)	専攻ごとの魅力をPRする広報活動等を強化します。(農学科)	入学を希望する学生の中には、SNSを見て関心を持ったと話す者がいたため、今後更に、動画を取り入れるなどにより魅力をPRする必要がある。	・専攻の魅力を伝える動画の作成 4 専攻	・魅力を伝える情報発信方法を学生と検討 ○別添「各専攻の取組」を参照	・各専攻において、学生が主体となり魅力を伝える情報発信方法を検討し、SNSやイベントなどを通じて情報発信の強化に取り組んだ。 ・2 専攻(酪農、豚鶏)で、専攻の魅力を伝える動画を作成した。 ・作成した動画をオープンキャンパスで活用した。 ○別添「各専攻の取組」を参照	C	・魅力を伝える情報発信方法を学生と検討 ○別添「各専攻の取組」を参照	・オープンキャンパスのキャンパスツアーで各専攻の魅力を伝えるPR資料の作成
3 農大ブランドづくりによる農大バリュー(価値)の構築	メーカー等との連携による独自商品の開発を推進します。(農学科)	本校の独自性のある商品には養豚・養鶏専攻のプリン、作物専攻の日本酒、露地野菜のピクルスがあるが、それに続く新しい商品の作出が望まれる。	・新商品の開発 1 事例	・メーカー等との連携、本校の独自性がある新商品の開発等に向けた活動を検討(4月～12月) ・新商品を試作・開発、実習販売や校内での販売(5～2月)	・4 商品を開発した。 ①果樹専攻が栽培、収穫した果実を利用したフルーツ大福餅、フルーツかき氷を三徳屋菓子舗と開発した。 ②露地野菜専攻で学生が作成したレシピを元にして、栽培、収穫した野菜で漬物加工品を株式会社アクトと開発した。 ③果樹専攻のシャインマスカット、露地野菜専攻のイチゴを利用したフルーツパフェをdasora coffeeと開発した。	A	・メーカー等との連携、本校の独自性がある新商品の開発等に向けた活動を検討(4月～12月) ・新商品を試作・開発、実習販売や校内での販売(5～2月)	・新商品の開発 1 事例
	専攻ごとにカリキュラムや取得資格等の魅力(価値)を充実強化します。(農学科)	果樹専攻の学生が、ダルメイン world マーマレード アワード & フェスティバル in Japanにおいて学生のマーマレードベストカテゴリー賞を受賞した。今後も魅力的な取組が必要である。	・各専攻のカリキュラム等の充実	・資格取得やコンクールへの出品を目指した取組を実施 ○別添「各専攻の取組」を参照	・各専攻において資格取得やコンクールへの出品等、カリキュラム内容の充実に取り組んだ。 ○別添「各専攻の取組」を参照	A	・専攻で一体となって取組むことができるコンクールや資格について検討 ・コンクールへの応募や資格に役立つ知識や技能の習得支援 ○別添「各専攻の取組」を参照	・各専攻独自の取組 1 回以上
	マーケティング技術の向上や情報発信などブランドづくりのための学習・研修を実施します。(農学科)	各専攻において、引き続き知識や技術を習得することが必要である。	・各専攻の実施回数 1 回以上	・直売、加工、流通に関する校外学習や講義の実施 ・ブランドづくりのための指導 ○別添「各専攻の取組」を参照	・直売、加工、流通に関する校外学習や講義を実施した。 ・ブランドづくりのための指導を実施した。 ○別添「各専攻の取組」を参照	A	・直売、加工、流通に関する校外学習や講義の実施 ・ブランドづくりのための指導 ○別添「各専攻の取組」を参照	・各専攻の実施回数 1 回以上

事項	取 組	現状及び課題	令和6年度 目標	令和6年度計画	令和6年度実績	評価	令和7年度計画	令和7年度 目標
4 農業高校等の連携強化	農業高校との学生・職員間の交流をプロジェクト発表、意見交換、研修会等を通じて充実します。 (農学科、学務科)	農業高校と積極的な連携を図り、農業高校生の動向やニーズをしっかりと把握していく必要がある。	・相互交流4回以上実施 ・進路ガイダンスへの学生参加3回	・意見交換、研修会等での職員間の交流の継続、研修会や進路ガイダンス等の場で農大生が農業高校の学生等と交流する機会の充実	・愛知県学校農業クラブ連盟意見発表会に職員2名が参加した(7/23)。 ・農業系高校の校長会、農業教育研究会で農大出前講座のチラシを配布した。 ・愛知県学校農業クラブ年次大会に校長が参加した(11/21)。 ・卒論発表会に農業高校教員11名が参加した(12/17)。 ・渥美農業高校の進路ガイダンスに酪農専攻の学生1名が参加した(6/20)。 ・県内農業高校2校がPTA研修会の研修先として農大を見学し、農大学生が保護者に対し本校の案内や情報提供・発信を行った。	A	・意見交換、研修会等での職員間の交流の継続、研修会や進路ガイダンス等の場で農大生が農業高校の学生等と交流する機会の充実	・相互交流4回以上実施 ・研修会、進路ガイダンス等への学生参加1回以上
	高校訪問や連携会議などにより農業高校等と農大志望学生の情報を共有化します。 (学務科)	県内農業高校からの志願者数は、R4入試48名、R5入試56名、R6入試52名と推移している。	高校訪問件数延べ200件 ・連絡会議の開催1回以上	・普通科高校を含む県内高校に対する高校訪問の実施及び入学志願者の発掘。志望者を把握した高校に対して、2回目の訪問を行い動向の把握。 ・進路担当主事及び農場長との連絡会議の開催、農大志望者等に関する情報の把握	・高校訪問については6～10月にかけて延べ215校訪問した。 ・進路ガイダンスで31校を訪問し農大志望学生の情報を共有した。 ・進路主事会(8/8)、農場長意見交換会(10/3)を開催し、農大志望者等の情報交換を行った。	A	・普通科高校を含む県内高校に対する高校訪問の実施及び入学志願者の発掘。志望者を把握した高校に対して、2回目の訪問を行い動向の把握。 ・進路担当主事及び農場長との連絡会議の開催、農大志望者等に関する情報の把握	・高校訪問件数延べ200件
	農業高校との技術交流を通じて農大との連携プロジェクトを実施します。(農学科)	農業高校との技術交流をすべての専攻が行ったわけではない。未実施の専攻において技術交流を行うなど、連携プロジェクトの実施に向けた取組が必要である。	・各専攻で技術交流の実施	・農大の各専攻と農高の各部門との情報交換及び技術的な交流会を実施	・畜産(10/9)、花き(10/15)、果樹(11/29)、作物と野菜部門(12/10)で農業高校との技術的な交流及び情報交換を行った。	A	・農大の各専攻と農高の各部門との情報交換及び技術的な交流会を実施	・情報交換及び技術的な交流会を1回以上開催
5 時代に対応した入学制度の検討	受験生や入学生の調査をもとに時代に対応した募集内容や受験方法等の見直しを計画的に行います。 (学務科)	県内農業高校からの志願者数は、R4入試48名、R5入試56名、R6入試52名と推移している。 女子志願者数は、R4入試34名、R5入試31名、R6入試26名と推移している。	・女子学生増加対策の検討	・推薦入試に係る見直しの実施と検証(一般推薦について県外からの推薦を可能にした) ・入学制度、女子学生増加対策の検討	・高校訪問等によりオープンキャンパス参加を働きかけ、県内農業高校からの参加者は129名(R5年度127名)であった。 ・各農業高校に専任の担当者を設け、主に特別推薦受験予定者の情報共有を行い、将来農業を志す学生の早期確保に努めた。 ・女子学生増加対策について検討した。 ・R7入試の女子志願者数は29名(合格者同数)であり前年から4名増であった。近年は26～31名程度で推移している。	A	・推薦入試に係る見直しを踏まえ、県外農業高校に対し、推薦入試の積極的な活用に向けた広報活動の実施	・県外農業高校への学校案内チラシの送付

3 多様な労働力の確保に向けた支援

項目	取 組	現状及び課題	令和6年度 目標	令和6年度計画	令和6年度実績	評価	令和7年度計画	令和7年度 目標
農福連携 の推進	福祉事業者向け研修を実施することにより農福連携の取組を推進します。 (就農企画科)	利用者の工賃向上のため農業への参入を考える障害者施設があり、研修への要望も高い。昨年度は15名の受講者があり14名が修了した。	・研修受講者数15人	・関係機関の連携による受講者の確保 ・受講者が最後まで参加しやすい研修の組立	・ホームページや農業経営課が事務局を持つ「あいち農福連携推進協議会」と連携して研修生を募集したところ、13名の応募があり、12名が受講した。 ・募集に当たっては、受講者が勤務先の勤務状況に応じて柔軟に受講できるように研修計画を設定し実施し、満足度は4.5と高い評価を受けた。	B	・関係機関の連携による受講者の確保 ・受講者が最後まで参加しやすい研修の組立	・研修受講者数15人

【目標2】地域農業を支える人材の育成及び就農支援

1 学校教育の充実

事項	取組	現状及び課題	令和6年度目標	令和6年度計画	令和6年度実績	評価	令和7年度計画	令和7年度目標
1 多様な学生に対応したカリキュラムの強化	時代に対応したカリキュラムの見直しを行います。（学務科）	国施策や農業経営の高度化等（有機農業、農産物輸出等）に対応するため、カリキュラムの見直しを進める必要がある。	・講師選定、カリキュラム案の作成	・令和5年度に実施したアンケート結果等を踏まえて、見直しを行うカリキュラムの決定、講師の選定等の実施	・カリキュラム編成会議を3回開催し、時代に即した内容として有機農業を取り入れたカリキュラム案を作成した。 ・次年度から有機農業に関する講義を2時間設け、外部講師に委託して実施することとなった。	A	・令和5年度に行ったカリキュラムの検証及び令和6年度に行った見直しを踏まえた新カリキュラムを実施していく中で、発生する問題点や課題等の抽出	・新カリキュラムの検証
	学生の学力や能力等の情報を共有するとともに、専門分野の知識を学ぶ能力に応じた取り組みを図ります。（農学科）	各専攻で学生との面談や学力調査の実施結果を共有し、各学生に応じた指導を行っている。	・専攻ごとの学生シートの作成	・引き続き、各専攻で学生との面談を年度当初に実施するとともに、学力調査を実施 ・調査結果の情報共有、各学生の学力等に応じた指導内容の検討	・各専攻で学生との面談を年度当初に実施した。 ・各専攻で調査結果の情報を共有し、各学生の学力等に応じた指導を行った。 ・専攻ごとに学生全員の学生シートを作成した。	A	・専攻で各学生との面談を年度当初に実施、面談結果を学生シートとして作成 ・学生シートの情報を専攻職員間で共有し、必要な専門知識及び各学生の学力等に応じた指導方針の作成及び指導	・学生別指導方針の作成及び指導
	企業や関係機関等と連携した教育プログラムの編成に取り組みます。（学務科、就農企画科）	令和5年度から企業と連携したカリキュラム「スマート農業技術」を新設した。	・講師選定、カリキュラム案の作成	・見直しを進めるカリキュラムについて、民間企業等との連携の可能性について検討	・カリキュラム編成会議を3回開催し、民間企業等と連携したカリキュラムの作成に向けて検討を行った。 ・企業等に講師の派遣を依頼し外部講師を選定することができた。	A	・見直しを進めるカリキュラムについて、民間企業等との連携の可能性について検討	・企業や関係機関との連携の検討
2 専攻実習等を通じた技術・経営力の向上	専攻ごとに定期的に学生の技術経営の習得レベルを評価し、各レベルに応じた教育指導を行います。（農学科）	ルーブリック評価表の一部見直しを行った。引き続き各専攻で各学期末の専攻学習の習得レベル評価に取り組む。	・基準の是非の検討 ・習得レベルに基づいた習得状況の評価	・学生の技術の習得レベルを評価する基準の是非について検討 ・共通基準に従って年3回評価を実施、習得レベルの評価 ・習得レベルを向上させるため、レベルに合わせた効果的な指導の実施	・習得レベルの評価基準を検討、周知した。 ・ルーブリック評価法を活用した専攻実習の習得レベル評価を全学生について行った。	A	・共通基準に従って年3回評価を実施、習得レベルの評価 ・各レベルに合わせた効果的な指導の実施	・評価表に基づいた習得レベルの評価
	GAPを取り入れた教育指導により生産・労働環境などのレベルを向上します。（農学科）	各専攻でGAPへの取り組みを行う。JGAPの認証についての詳細が不明確である。	・各専攻でGAPへの取り組み実施。 ・コンサルタントを招いての勉強会の実施。	・各専攻担当によるGAP指導担当者会議の開催、GAP導入による実習改善方法や先進事例の紹介 ・コンサルタントを招いてJGAP認証について学習	・GAP指導担当者会議を開催し(8/27)、取り組み状況を確認し、校内の優良事例を見学し改善した。(2/13)。 ・7年度にJGAP認証に向けてコンサルタントを招いて指導を受けることとなった。	C	・各専攻担当によるGAP指導担当者会議の開催、GAP導入による実習改善方法や先進事例の紹介 ・コンサルタントを招いてJGAP認証や農場HACCP取得について学習 ・各専攻の作業場・倉庫の点検、GAP手法に基づいた必要な環境整備の実施	・GAP又はHACCPを取り入れた生産・環境改善の取組各専攻1事例

事項	取 組	現状及び課題	令和6年度 目標	令和6年度計画	令和6年度実績	評価	令和7年度計画	令和7年度 目標
2 専攻実習等を通じた技術・経営力の向上（続き）	実習販売等を通じてマーケティングや経営管理能力を向上するための学習活動を推進します。（農学科）	実習販売を行っているが、マーケティングや経営管理能力の向上に十分結びついていない。	・改善計画案を作成できる	・各専攻で学生による実習販売の収支の把握やシミュレーションなどの指導を実施 ・収支結果などの経営評価を実施 ○別添「各専攻の取組」を参照	・各専攻で学生による実習販売の収支の把握やシミュレーションなどの指導を実施した。 ・収支結果などの経営評価を実施した。 ○別添「各専攻の取組」を参照	A	・学生による実習販売の収支の把握やシミュレーションなどの指導を実施 ・収支試算などの経営評価の実施 ・校外学習により農業者等の優良経営を学習 ○別添「各専攻の取組」を参照	・能力向上の取組各専攻1回以上
	新技術や地域課題、継続課題等プロジェクト学習の高度化を図ります。（農学科）	プロジェクト学習の中で、試験区設定や調査項目の不備等、計画段階で検討不足な課題が散見された。 本校の卒論発表資料では、他府県にみられるような動画表現を活用できていない。	・プロジェクト学習における個別計画の充実と動画活用の検討	・学生による計画書作成の十分な時間の確保、班長確認のプロセスの追加 ・分かりやすい発表方法の検討	・農学科職員会議で、プロジェクト学習の分かりやすい発表方法を検討した(4/9)。 ・プロジェクトの計画段階、中間発表に、班長確認のプロセスを加えた。	A	・計画書作成時の班長確認の継続実施 ・各専攻の卒業論文発表会時におけるプレゼンテーション手法の指導	・全国大会への出場1名以上
	学生による校内の自主活動を推進するため学生会等の活動を強化します。（学務科、農学科）	学生会は定期的に集まり活動しているが、より自主的に活動させていく必要がある。また、学生会が学生の意見を集約し、学生会から主体的な提案ができるような体制を構築する。	・連絡会の定期的な開催及び寮委員会による自主的な寮運営の体制構築	・学校活動の運営について学生会への積極的な参画の働きかけ、学生会から主体的な提案ができるよう職員・学生連絡会の定期的な開催 ・農大祭を始めとした学校行事を学生が自主的に運営する体制への誘導	・学生会総会や職員・学生連絡会を計3回開催した。また、学生会役員会を定期的に開催し、学務科職員と学生会との打合せを4回行った。 ・学生に対し、学校行事に積極的に関わり、農大祭実行委員会（6回）を自主的に運営するよう指導した。	A	・学校活動の運営について学生会への積極的な参画の働きかけ、学生会から主体的な提案ができるよう職員・学生連絡会の定期的な開催 ・農大祭を始めとした学校行事を学生が自主的に運営する体制への誘導	・連絡会の定期的な開催及び寮委員会による自主的な寮運営の体制構築
3 学生のコミュニケーション力・社会性の向上	地域イベントやボランティア等学生による課外活動の実施を支援し学生の社会性向上を図ります。（学務科、農学科）	学生が参加できる地域イベントやボランティアの情報が不足している。	・地域イベント等への参加	・地域イベントやボランティア参加の意向調査、地域イベント等の情報収集、積極的な参加誘導	R6.11.3に第51回岡崎市農林業祭のイベントに参加して、農大産農産物の販売を行い、消費者(購入者)との会話等でコミュニケーション力を高めることができた。 R6.11.10にホルスタイン共進会でボランティア活動を行い、酪農農家等とのコミュニケーションを取ることができた。	A	・地域イベントやボランティア参加の意向調査、地域イベント等の情報収集、積極的な参加誘導 ・参加可能なイベント等に対して、学生に対する参加誘導及び実行支援	・学生の地域イベントやボランティア等の課外活動参加2回以上
	学生や指導者向けの研修会等の実施、意見発表などの参加促進により学生のコミュニケーション力を強化します。（学務科、農学科）	コミュニケーション力を十分習得できていないため、派遣実習・就職活動等外部と係わる活動で支障を来す学生がいる。	・懸賞論文にすべての1年生の学生が参加	・自分の考えや成果を人前で発表できる機会の創出及び、全学生に参加誘導（派遣報告会及び卒業論文発表会の他に各学年1回ずつ、年間2回/学生） ・懸賞論文等への応募支援	・1年生は自分の派遣研修の相手先との調整を各自で責任を持って行った他、派遣研修の開始式で抱負、目標などのスピーチを行った。 ・2年生は各専攻で卒業論文の中間報告会、卒業論文発表会を行った。 ・すべての1年生の学生がヤンマー懸賞作文または酪農の夢コンクールに応募し、2名が上位入賞した。	A	・自分の考えや成果を人前で発表できる機会の創出及び、全学生に参加誘導（派遣実習報告会及び卒業論文発表会を除く）。 ・進路セミナーなどで外部講師を招きコミュニケーション力の向上支援	・コミュニケーション力向上の取組各学年1回、年間2回

事項	取 組	現状及び課題	令和6年度 目標	令和6年度計画	令和6年度実績	評価	令和7年度計画	令和7年度 目標
4 高度な教育環境の整備	メーカー等と連携し先進的な機器や技術の実習指導を実施します。（農学科）	スマート農業や高度な経営管理の知識や技術を習得するため、実践的に学ぶ機会を増やすことが必要である。	・各専攻のカリキュラムを実施	・スマート農業を取り入れた専攻別のカリキュラムを実施 ・メーカーと連携したスマート農業実演会を実施 ○別添「各専攻の取組」を参照	・スマート農業を取り入れた専攻別のカリキュラムを実施した。 ・R6.11.6にメーカーと連携したスマート農業実演会を実施した。 ・酪農専攻では、牛舎細霧システムを導入し活用方法を指導した。 ○別添「各専攻の取組」を参照	A	・スマート農業を取り入れた専攻別のカリキュラムを実施 ・メーカーと連携したスマート農業実演会の実施 ○別添「各専攻の取組」を参照	・各専攻のカリキュラムを実施
	学習や生活（寮）環境の快適化や教育のデジタル化などの整備を推進します。（管理課、企画研修部、教育部）	専攻室等施設の設備が古く不具合が多いこと、教育のデジタル化に資する環境整備が不十分なことにより、学校運営に支障をきたしている。	・必要な整備事業の予算化	・環境整備のための具体的な内容を精査し、予算要求の実施	・教育のデジタル化や先端技術に対応した施設・機器の整備のため、施設設備整備費として9件の予算を要求し、結果、校内ネットワーク端末の整備費用始め7件、212,158千円の予算を確保した。	B	・環境整備のための具体的な内容を精査し、予算要求の実施	・必要な整備事業の予算化
	先進技術に対応した施設・機器の整備を計画的に推進します。（管理課、企画研修部、教育部）	各グループごとに作成した施設設備整備計画に沿って予算を要求するとともに、実態に合うように更新する。	・施設設備整備計画の更新 ・計画に沿った予算の確保	・施設、機器の現状を整理し、施設設備整備計画の更新 ・農大全体のネットワーク整備	・スマート農業機器を始めとした施設設備整備計画を更新した。 ・乳用牛の暑熱対策としてクールエアシステムを導入した。 ・校内の西エリアを中心としたネットワーク整備工事を実施した。 ・国事業の内示減により一部導入できない設備があった。	B	・施設、機器の現状を整理し、施設設備整備計画の更新	・必要な施設、機器の予算化 ・施設設備整備計画の更新
5 指導職員の技術・教育指導能力の向上	外部研修や現場調査など職員研修の充実強化を図ります。（就農企画科、農学科）	職員研修会議を開催し年間の研修計画を立て、職員の研修に取り組んでいる。職員の研修参加率は7割以上に達しており、この参加率を維持していく必要がある。	・職員の研修参加率 職員の7割以上	・職員研修会議での研修計画、受講希望者の取りまとめ ・校内で開催する研修への参加啓発 ・県外の優良事例調査等の実施	・職員研修会議を開催し、免許等資格取得研修の受講者選定方法や、指導力強化を目的とした研修の受講計画を検討した。 ・免許や資格取得に関する研修は21名が受講した。 ・全職員が関係する職場研修の刈払い機研修に14名、鳥インフルエンザ防疫研修には26名の職員が参加した。 ・各種研修に1回以上参加した職員の割合は91%だった。	A	・職員研修会議での研修計画、受講希望者の取りまとめ ・校内で開催する研修への参加啓発 ・県外の優良事例調査等の実施	・職員の研修参加率 職員の7割以上
	農業総合試験場や農業改良普及課等関係機関と連携し研修を実施します。（農学科、担い手研修科長）	学生への指導能力を向上させるには、外部の専門家から指導力のノウハウや新しい技術・知識を学び、職員自らが成長する必要がある。	・職員の参加合わせて5人以上	・農総試の成果発表（生産高度化研修等）や国、民間企業等が行う実演会等への職員参加 ・農業改良普及の活動事例発表会への職員参加	・生産高度化研修(6/21野菜、7/29作物、10/11畜産、10/17果樹)に農学科職員6人が参加した。	A	・農総試の成果発表（生産高度化研修等）や民間会社が行う実演会等への職員参加 ・農業改良普及の活動事例発表会への職員参加	・職員の参加合わせて5人以上

2 学生の就職・就農の支援

事項	取 組	現状及び課題	令和6年度目標	令和6年度計画	令和6年度実績	評価	令和7年度計画	令和7年度目標
1 進路別指導の強化	キャリアごとに必要な各種免許・資格の取得を推進します。（農学科）	進路セミナー、学生連絡会等において各種免許・資格取得を働きかけ、2年次における新たな資格等取得は63%であった。	・2年次に1以上取得できた学生の割合50%以上	・学生面談(5月)、進路セミナーで進路意向と免許・資格等取得状況及び希望調査の実施 ・自営や雇用就農希望の2年生に対して、免許・資格等の取得状況の確認及び、未取得者に対する取得の推進	・進路セミナー、学生連絡会において希望進路に必要な免許・資格等取得するよう働きかけた(4~2月)。 ・令和6年度新たに1以上免許・資格等取得できた学生の割合は2年生57%(1年生46%)であった。	A	・学生面談(5月)、進路セミナーで進路意向と免許・資格等取得状況及び希望調査の実施。 ・自営や雇用就農希望の2年生に対して、免許・資格等の取得状況の確認及び未取得者に対する取得の推進	・免許・資格について2年次に1以上の取得できた学生の割合50%以上
	学生への進路指導セミナー等を充実強化します。（農学科）	進路指導セミナーを主に就職活動を中心とした内容で5回開催した。	・進路セミナー5回及び進路別セミナー(就農・進学・実習助手各1回)の開催	・進路別の指導担当の設置、既存の進路セミナーの実施内容の見直し及び、進路別セミナー等の開講 ・企画研修部と連携した、就農希望者に対する就農説明会への参加誘導	・進路指導会議で進路別指導担当を選任した(4/5)。 ・1年生対象に就活の進め方等について進路セミナーを5回開催した(6/28、10/28、12/13、1/17、2/6)。 ・進路別セミナー参加希望アンケート(4/11)の結果、延べ81名の参加希望があった。 ・就農セミナー(6/3)に14名が参加した。企画研修部開催の就農説明会にも参加して情報収集するよう指導した。 ・実習助手セミナー(6/10)に13名が参加した。個別に小論文を添削指導。 ・進学セミナー(7/12)に5名が参加した。個別に志望理由書の添削、模擬面接指導等を行い、4名が合格した。	A	・進路別の指導担当のを設置、既存の進路セミナーとは別に、進路別セミナーの開催 ・企画研修部との連携及び、就農希望の学生に対する就農説明会への参加誘導	・進路セミナー5回及び進路別セミナー(就農・進学・実習助手各1回)の開催
2 就農指導・相談体制の強化	農起業支援ステーションと連携し就農希望学生向けの相談機能を強化します。（就農企画科、農学科）	農起業支援ステーションでの就農相談体制を学生に周知しているが、就農説明会への参加者は少ない。	・就農説明会での情報提供	・学生が集まる機会を利用して就農相談体制について周知 ・農学科と連携し、就農説明会への誘導	・進路指導会議で農学科各専攻職員に情報共有するとともに、終業式(7月、12月)、始業式(9月)で学生に周知した。 ・学生向け掲示板に就農説明会の開催日程及び参加方法を掲示・周知した(9~3月)。 ・特に先輩農業者の体験発表がある就農説明会を重点に学生に案内した。 ・学生の就農説明会への参加があり、個別相談も実施した。	A	・進路指導会議等での農学科各専攻職員への周知 ・学生向け掲示板を活用した就農説明会の開催周知 ・個別相談の実施	・就農相談体制活用の周知
	JAや農業改良普及課等関係機関と連携し就農支援を強化します。（就農企画科、農学科）	卒業後に就農する学生の情報を普及課やJAと共有し、就農時に必要な支援が受けられるようにする必要がある。	・就農希望学生に対する個別相談	・就農相談を通じて学生の問題解決を図り、円滑な就農を支援 ・就農が具体的になった学生の情報を関係機関で共有	・就農希望の学生2名への対応(8/23、2/19) ・年度末に就農予定をとりまとめて共有した。	A	・就農が具体的になった学生の情報を関係機関に情報共有	・就農予定学生情報の関係機関への共有

事項	取 組	現状及び課題	令和6年度 目標	令和6年度計画	令和6年度実績	評価	令和7年度計画	令和7年度 目標
2 就農指導・相談体制の強化 (続き)	雇用就農した卒業生との意見交換会等雇用就農者向けのセミナーを強化します。 (農学科)	従前から実施している「ようこそ先輩」を雇用就農した卒業生との意見交換の場として実施した。	・意見交換の実施	・「ようこそ先輩」を雇用就農した卒業生意見交換の場と位置づけて実施 ・既存の進路セミナー講師として雇用就農した卒業生の招へいを検討	・「ようこそ先輩」の講師として、雇用就農した卒業生(2名)を招へいし、学生との意見交換の場として実施できた(11/8)。	A	・「ようこそ先輩」を雇用就農した卒業生との意見交換の場と位置づけて実施 ・既存の進路セミナーにおいて卒業生を雇用している農業法人等に講師を依頼	・意見交換の実施
	農業法人への意向調査や雇用就農した卒業生の状況調査等の実施します。(農学科)	R3年度から学校への求人票に基づく雇用就農3年目の卒業生を対象に、定着状況を調査している。併せて雇用した法人等の意向調査も実施している。	・卒業生の定着状況の把握	・本校に届いた求人票により雇用就農した令和4年3月の卒業生(就農3年目)11名の定着状況の調査 ・併せて雇用した法人等に対する意向調査の実施	・令和4年3月の卒業生(就農3年目)で雇用就農した15名のうち、10名が継続雇用と確認できた(9~10月)。 ・雇用した法人等15件に意向調査し、10件から求める能力・人材、必要な免許・資格等について回答を得た(10~11月)。	A	・学校への求人票により雇用就農した令和5年3月の卒業生(就農3年目)16名の定着状況の調査 ・併せて雇用した法人等にも意向調査の実施	・卒業生の定着状況の把握

3 研修生（新規就農希望者）の育成及び就農支援の強化

項目	取 組	現状及び課題	令和6年度 目標	令和6年度計画	令和6年度実績	評価	令和7年度計画	令和7年度 目標
1 研修内容 や運営方 法の充実	経営やマーケティング等の知識や技術に関する指導を強化します。（担い手研修科）	ニューファーマーズ研修講義の一部リモート配信は軌道に乗り、受講者からも好評であるため、受講率向上のため引き続き実施する。	・ニューファーマーズ研修受講生 受講率 80%	・実施可能な講義のリモート配信 ・実施結果の検討と改善	・受講率は、86.7%と良好だった。 ・リモート配信の技術的なトラブルはなく、適切に実施できた。 ・全79講義中、27講義をリモート配信し（5/23～1/9）、延べ189人（実人数9人）が受講した。対象27講座のリモート受講率は23.7%だった。 ・講義を欠席又はリモート配信で受講できなかった者に対して、来校時に動画を視聴させることで受講とした（6回、延べ20人）。 ・オンラインのメリットとして、実習の都合や悪天候等で登校できない際の活用があり、配信を利用した9名のうち8名がリアルタイムと同等以上の効果があったと評価した。一方で、音声の一部聞き取りにくい点が課題であった。	A	・実施可能な講義のリモート配信 ・アンケート結果に基づく実施方法の改善	・ニューファーマーズ研修受講生 受講率 80%以上
	就農後の農業経営に必要な（有用）な資格や免許の取得を推進します。（担い手研修科）	研修生が円滑に就農できるよう、農業機械研修の受講を推進している。受講希望者は年度により大きな幅があるが、前年度は受講者の45.5%が1以上の免許・資格を取得した。	・資格・免許取得率 30%	・新規就農希望者向け3研修の受講者を対象に、研修後の就農に必要な資格取得研修（フォークリフト・小型建機・刈払機）や免許取得研修（大特免許）の受講推進	・長期3研修生の46.4%（56人中26人）が農業機械研修を受講し、免許・資格を取得した（大特22、小型建機17、刈払機3）。 ・面談等を通じて、有効と思われる者に積極的に受講するよう推進した。	A	・新規就農希望者向け3研修の受講者を対象に、研修後の就農に必要な資格取得研修（フォークリフト・小型建機・刈払機）や免許取得研修（大特免許）の受講推進	・資格・免許取得率 40%以上

項目	取 組	現状及び課題	令和 6 年度 目 標	令和 6 年度計画	令和 6 年度実績	評価	令和 7 年度計画	令和 7 年度 目 標
1 研修内容 や運営方 法の充実 (続き)	研修生への個別指導により就農に必要な指導を行います。 (就農企画科、担い手研修科)	4 年度からニューファーマーズ研修を加え、農業技術研修、農業者育成支援研修の 3 研修で年間 2 回の個人面談を行うこととした。就農意向の確認や助言を適切に行うため、継続する必要がある。	・個別面談の実施 各研修 2 回／年	・新規就農希望者向け長期 3 研修において、研修生の就農準備状況等の聞き取りと助言の実施 ニューファーマーズ研修： 6 月、12 月 農業者育成支援研修： 6 月、12 月 農業技術研修： 7 月、11 月	・ 3 研修とも 2 回の面談を実施し、就農準備状況等の聞き取り、適宜助言指導した。就農希望状況により農起業支援ステーション担当も同席した。 ・ニューファーマーズ研修(NF研修) ステーション職員同席のうえ 20 人全員に実施した(1 回：6/20・25・27、2 回：9/11、10/11・15・17、11/7)。 ・農業者育成支援研修(育支研修) NFと同様に 11 人全員に実施した(1 回：7/26、8/2・9、2 回：11/25・27、12/4)。 ・農業技術研修(農技研修) 一部はステーション職員同席の上 26 人全員実施した(1 回：6/19・24・25・26、2 回：就農相談 9/11・13/20、10/9・15、キャリアコンサルティング 9/9・17・24・29、10/7)。	A	・新規就農希望者向け長期 3 研修において、研修生の就農準備状況等の聞き取りと助言の実施 ニューファーマーズ研修： 6 月、12 月 農業者育成支援研修： 6 月、12 月 農業技術研修： 7 月、11 月	・個別面談の実施 各研修 2 回／年
2 現場と連携した就農 支援の強化	関係機関との連携により独立自営就農や農業法人への雇用就農に向けて円滑な誘導を図ります。 (担い手研修科、就農企画科)	新規就農者向け 3 研修を合わせた就農率は 70% 以上を維持している。引き続き研修生全員への個別面談や就農希望者へのアドバイスを行い、関係機関とも連携して就農者を確保していくことが求められる。	・就農率 70%	・個別面談による新規就農者向け 3 研修の全研修生の意向把握 ・就農希望者への農起業支援ステーションによる就農相談の実施 ・ニューファーマーズ研修生の経営計画の作成支援	・就農率は 78.5% (56 人中 44 人) となった。 ・新規就農者向け 3 研修の研修生 56 人に対し、全員 2 回面談を実施し、意向等を把握した(6 月～12 月)。 そのうち、7 名の研修生に対してステーションとして個別相談対応し、2 名を二次相談に移行した。 ・ニューファーマーズ研修生は全員が経営計画を作成した(2/27)。	A	・個別面談による新規就農者向け 3 研修の全研修生の意向把握 ・就農希望者への農起業支援ステーションによる就農相談の実施 ・ニューファーマーズ研修生の就農計画の作成支援	・就農率 70%

【目標3】地域農業を担う農業経営者の育成支援

1 経営の発展段階に応じた体系的な研修の充実・強化

事項	取組	現状及び課題	令和6年度目標	令和6年度計画	令和6年度実績	評価	令和7年度計画	令和7年度目標
1 農業経営の発展に必要な知識や技術に関する研修の充実・強化	農業生産性の向上や効率化に繋がる先進的な技術・知識を習得するための研修を農業総合試験場等との連携により実施します。 (担い手研修科)	農業総合試験場が開発した最新技術や県内外で行われている先進的な取組事例等を、県内農業者に的確に伝えるため、農業改良普及課や生産者団体と連携して、今後も年間10回の生産高度化研修を維持していく必要がある。	・農業者生涯教育研修（生産高度化研修）の開催 5部門で計10講座／年	・農業改良普及課や農業総合試験場との連携強化により、現場の要望や先進的な試験研究成果等の的確な反映 ・農業者団体等と連携して参加者の募集や研修の運営推進	・生産高度化研修は、畜産部門で1講座としたことに対し、果樹部門で3講座とし、全体で10講座の計画ができた(4/19)。 ・2月中旬までに全10講座終了し(6/21、7/5・29、8/20、9/4、10/11・17、11/16、12/5、2/12)、計画定員920人に対し965人(104.9%)の参加があった。	A	・農業改良普及課や農業総合試験場との連携強化による、現場の要望、先進的な試験研究成果や農業情勢等を的確に反映した研修計画の作成 ・農業者団体等と連携した参加者の募集や研修の運営	・農業者生涯教育研修（生産高度化研修）の開催 5部門その他で計10講座／年以上
	農業者のニーズに対応した免許・資格取得に関する研修の充実を図ります。 (担い手研修科)	大特免許(農耕車限定)取得者数の増加に伴い、けん引免許(農耕車限定)研修の受講希望者が増加している。また、トラクター作業研修は研修日程・内容を見直したことにより、受講希望者が増加している。	・農業者のニーズ等に対応した研修項目の整理・統合	・研修受講申込状況や受講者アンケートによるニーズの把握・分析 ・ニーズに対応した研修計画の作成	・大特免許研修定員に対する実質申込倍率(申込実人数/定員)は1.1倍(179/156)、一方、けん引免許研修では2.6倍(62/24)だった。また、トラクター作業研修は1.3倍(31/24)で、定員を増やしたことにより、3.3倍だった昨年より低下した。 ・実質申込倍率から、次年度の免許研修実施回数の変更を検討する(大特(8回→7回)・けん引(2回→3回))。	A	・ニーズに対応した研修計画の作成と実施	・農業者のニーズ等に対応した研修の計画と実施
	農業経営の発展段階に応じた効果的な研修内容の企画立案や研修教材の開発を推進します。 (就農企画科)	就農前後の新規就農者が利用できる教材として、昨年度は2本の動画を提供した。教材の数としてはまだ十分といえず、新たな動画等の追加が課題になっている。	・新たな教材案の作成	・提供できる教材の検討 ・教材、研修内容に関する関係機関との意見交換	・AICHI X TECH事業の活用によるバーチャル農業体験システムを試行運用した。 ・先輩農業者の取材を行い、6本の動画を作成した。	A	・農林漁業者確保推進事業における支援ツールの検討	・支援ツールの原案ができる

事項	取 組	現状及び課題	令和6年度 目標	令和6年度計画	令和6年度実績	評価	令和7年度計画	令和7年度 目標
2「あいち 農業経営 塾」(旧「愛 知農業次 世代リー ダー塾」) の充実・強 化	経営発展期に必要な 農業経営力の向上に繋 がるための体系的なカリ キュラムとして講義 内容の充実を図ります。 (担い手研修科)	農業経営力向上の 研修として開設から 6年が経過しており 受講生から高評価を 受けているが、平均 受講者数は17人で定 員を下回っている。	・受講者数 20人/年 ・経営計画 作成率100%	・農業改良普及課および過去の受 講生に対する受講者募集の協力依 頼 ・直売主体経営、系統販売主体経 営とも有益となる研修の実施	・22人の受講生で開講(8/28)、経営計画の 作成率は100%であった(2/14)。 ・受講生募集のため7農業改良普及課を訪 問し(6/17・19・24・28)、また、生産高度化 研修で情報提供した(6/21、7/5)。 ・塾後半で経営計画作成を支援し、20件(2 件は2人共同)の計画ができた。	A	・実施状況等に基づく講義内容の 変更検討 ・農業改良普及課他関係機関及び 過去の修了者に対する受講者募集 の協力依頼	・経営計画 作成率 100%
	研修成果を確認する ため、研修修了生の状 況調査を実施します。 (担い手研修科)	過去の修了生に対 し経営状況調査を実 施しており、平成 30、31年度の修了生 は8割以上で経営目 標を達成している。	・修了生交 流会の開催 ・アンケート の実施	・過去の研修修了生による修了生 交流会の実施 ・修了生へのアンケートと問題が 生じている者の「あいち農業経営 相談所」への誘導	・交流会は、開塾した平成30年度から直近 の令和5年度の全修了生88人を対象とし、 開催通知に併せて令和3～5年度修了生47 人にアンケートを実施した。 ・交流会は、21人が出席。2人が事例発表 し、意見交換した(2/20)。 ・アンケートの結果、20人から回答があ り、経営目標を2割の者がほぼ達成、8割 が現在進行中である。	A	・過去の研修修了者による修了者 交流会の実施 ・修了者へのアンケートの実施と 「愛知県農業経営・就農支援セン ター」の紹介	・修了者交 流会の開催

各専攻の取組内容（令和6年度実績・令和7年度計画）

目標1-2-2 情報発信の強化

専攻ごとの魅力をPRする広報活動等を強化します。（農学科）

専攻	令和6年度計画	令和6年度実績	令和7年度計画
鉢緑	・学生が実習や加工演習の様子をSNS上で情報発信する。専攻紹介パネルの内容を更新し、農大祭や校外イベントで情報発信する。	・14回の情報発信を行った。専攻紹介パネルを作成し、農大祭で掲示した。	・学生が実習や加工演習の様子をSNS上で情報発信する。専攻紹介パネルの内容を更新し、農大祭や校外イベントで情報発信する。
切花	・学生が栽培品目の生育状況、実習販売等の情報発信をSNS上で行う。専攻紹介パネルの内容を更新し、農大祭や校外イベントで情報発信する。	・3人の班長学生が中心となって、24回の情報発信を行った。 ・専攻紹介パネルを作成し、農大祭で掲示した。	・学生が栽培品目の生育状況、実習販売等の情報発信をSNS上で行う。専攻紹介パネルの内容を更新し、農大祭や校外イベントで情報発信する。
作物	・水稻の生育状況や品種毎の特徴、美味しさなどをPOPやSNSを通じてPRする。	・収穫の状況について、SNSに投稿を行った。直売時にその日に販売する米の特徴のポップを作成した。	水稻の生育状況や品種毎の特徴、美味しさなどをPOPやSNSを通じてPRする。
果樹	・専攻紹介動画の更新。夏までに学生と協議・追加編集した改訂版を作成し各機会を通じてPRを行う。	・学生と専攻動画について協議し、2月に改訂版を作成した。	果樹の生育状況や品種毎の特徴、美味しさなどをPOPやSNSを通じてPRする。
露野	・品目・品種ごとに生産物の特徴を記したポップづくりを行い、直売や農大祭で情報発信を行う。	・1学期に1、2年生の全員で一人1枚のポップを作成して、直売で掲示して情報発信した。	・職員と学生が協力して、SNS等による写真・動画などの配信を行う。
施野	・SNSや広報誌等を活用して専攻の活動や施設野菜の魅力をPRする。	・農大だよりに毎月専攻トピックスで専攻の活動の情報を発信した。 ・インスタで4件の情報を発信した。	・SNSや広報誌等を活用して専攻の活動や施設野菜の魅力をPRする。
酪農	・職員と学生が協力して、SNS等による写真・動画などの配信を行う。	・学生が中心となって、9回の情報発信を行った。また、動画を作成し、オープンキャンパスなどで活用した。専攻紹介パネルを作成し、農大祭で掲示した。	・職員と学生が協力して、SNS等による写真・動画などの配信を行う。
豚鶏	・職員と学生が協力して、SNS等による写真・動画などの配信を行う。	・学生が中心となって、3回の情報発信を行った。また、動画を作成し、オープンキャンパスなどで活用した。専攻紹介パネルを作成し、農大祭で掲示した。	・職員と学生が協力して、SNS等による写真・動画などの配信を行う。

目標1-2-3 農大ブランドづくりによる農大バリュー（価値）の構築

専攻ごとにカリキュラムや取得資格等の魅力（価値）を充実強化します。（農学科）

専攻	令和6年度計画	令和6年度実績	令和7年度計画
鉢緑	・実習で栽培した鉢物を活用したアレンジ技術を取得させ、付加価値の高い商品作りを習得させる。 ・栽培したハーブを使用したクッキー、パスタなどの調理方法を加工演習で習得させる。	・鉢物を活用した加工演習でアレンジ手法を学んだ。農大祭販売用に付加価値の高い商品を作成し、加工演習の成果を披露した。 ・栽培したハーブ等を使用したクッキーなどの調理方法を習得した。	・実習で栽培した鉢物を活用したアレンジ技術を取得させ、付加価値の高い商品作りを習得させる。 ・栽培したハーブを使用したクッキー、パスタなどの調理方法を加工演習で習得させる。
切花	・切花を活用したフラワーアレンジ技術を取得させ、新たな資格取得を目指す。 ・切花各論の中で、輪ギク、スプレーギク等の県育成品種の栽培方法を習得させる。	・フラワー装飾技能検定3級取得を目指し、カリキュラム内容を可能な限り変更して、2年生5名が加工演習に取り組んだ。 ・県育成品種「スプレー愛知夏1号」の特性について講義し、実際に栽培させることで栽培方法の習得を図った。「かがり弁白、赤紫」は年末作型で栽培し、技術の習得を図った。	・切花を活用したフラワーアレンジ技術を取得させ、新たな資格取得を目指す。 ・切花各論の中で、輪ギク、スプレーギク等の県育成品種の栽培方法を習得させる。
作物	・専攻実習を通じて大型機械の扱いに慣れさせる。また、大型特殊免許やフォークリフト、けん引免許など、農大で取得可能な資格取得を推進する。	・様々な学生にコンバイン等の作業をしてもらい、扱いに慣れさせた。また、夏季休暇を利用して、学生の資格取得を推進した。	ICT技術（可変施肥対応田植え機、ドローンなど）に触れる機会を多く作り、ICT技術を学ぶ。
果樹	・バラエティパック値上げに際し、客の理解・納得を得るため「中身（品質）の充実」を学生と協議・実践する。単なる経費高騰の値上げとせず、この機会を使い農大が提供する商品の価値を学生と考える、再構築する場とする。	・バラエティパックの中身と単価について学生と協議し、ブドウの品種を3色（黒系、赤系、緑系）にし、ナシの品種をより顧客ニーズの高い品種とした。また、市場販売価格等を参考に単価も25％上げた。	秋冬の販売に向けた新たな品目の導入に向けて、品目の選定、栽培計画の作成、ほ場整備を学生と協議し、実施する。
露野	・農大産野菜を使用した演物を民間企業で委託生産し、直売や農大祭で販売することで、六次産業化への取り組みを学習する。	・学生が作成したレシピに対して、学生内で投票して、ベスト3を民間企業に委託生産を依頼し、1月から販売を開始し、六次産業化への取り組みを学習した。	・愛知県育成品種「あいさりり」を導入し、その栽培技術を学習させる。
施野	・高糖度のトマトを市場出荷や直売で販売し、高付加価値商品づくりを目指すとともに販売戦略について学ぶ。	・高糖度のトマトを直売で販売して、購入者に価格と品質を聞き取り、販売戦略を学んだ。	・高糖度のトマトを市場出荷や直売で販売し、高付加価値商品づくりを目指すとともに販売戦略について学習させる。
酪農	・人工授精師等の資格取得の推進や乳牛共進会等での上位入賞を目指した飼養管理技術を習得する。	・15名の学生が人工授精の資格を取得した。また、乳牛共進会に2頭出品した。	・人工授精師等の資格取得の推進や乳牛共進会等での上位入賞を目指した飼養管理技術を習得する。
豚鶏	・ハムソーセージ（＋チーズ・アイスクリーム）製造実習を行い、SNS等で発信する。 ・名古屋コーチンの魅力を実習販売等の機会を捉えて、情報提供する。	・畜産物の製造実習を行い、SNS等で発信した。また、名古屋コーチンの魅力を実習販売を通じて発信した。	・ハムソーセージ（＋チーズ・アイスクリーム）製造実習を行い、SNS等で発信する。 ・名古屋コーチンの魅力を実習販売等の機会を捉えて、情報提供する。

マーケティング技術の向上や情報発信などブランドづくりのための学習・研修を実施します。(農学科)

専攻	令和6年度計画	令和6年度実績	令和7年度計画
鉢緑	・マーケティング(直売、販売関係)に関する校外学習の実施。 ・外部講師を招いて花き流通論の講義を実施する。	・農家への校外学習時にマーケティング、流通の講義を受けた(6月)。 ・外部講師を招いて花き流通論の講義を実施した。 ・豊明市場を視察し、花き流通現場の実情を学んだ。	・マーケティング(直売、販売関係)に関する校外学習の実施。 ・外部講師を招いて花き流通論の講義を実施する。
切花	・校外学習、専攻実習でマーケティング(直売、加工)に関する学習を実施する。 ・外部講師を招いて花き流通論の講義を実施する。	・農家への校外学習時にマーケティングの講義を受けた(11月)。 ・外部講師を招いて花き流通論の講義を実施した。 ・名港花き市場を視察し、花き流通現場の実情を学んだ。	・校外学習、専攻実習でマーケティング(直売、加工)に関する学習を実施する。 ・外部講師を招いて花き流通論の講義を実施する。
作物	・マーケティングについてのグループワークを行い、そこで出た意見を2つ以上実践する。	・マーケティングの授業の中で、KJ法を用いてグループワークを行い、生産や販売に関する意見を多数出してもらった。その意見の中から2件実践した。	マーケティング(6次産業化)に関する校外学習の実施。
果樹	・マーマレードアワード参加により蓄積したノウハウにより、学生と独自のイチジクジャムアワード開催に取り組む。開催計画・準備等を通じマーケティング・PR手法について学習する機会をつくる。	・校外学習でイチジク直売農家へ視察に行き、イチジクジャムについて意見交換を行った。11、12月にイチジク加工演習において、実習と食味会を行い、PR方法を考えさせ、学生主導でラベルのリニューアルを行った。	マーケティング(6次産業化)に関する校外学習の実施。
露野	・マーケティング(直売、流通関係)に関する校外学習の実施。	・11月29日に大田市場を視察して、マーケティング(流通)を学ぶ校外学習を実施した。	・マーケティング(直売、流通関係)に関する校外学習の実施。
施野	・校外学習で流通販売や直接取引に関する現場を視察する。	・11月29日に校外学習で流通販売の現場(太田市場)を視察した。	校外学習で流通販売や直接取引、販売現場等に関する場を視察させる。
酪農	・六次産業化(牛乳・乳製品、牛肉)を実践している農場及び乳業工場の見学(校外学習)を行う。	・六次産業化(牛肉)を実践している農家の校外学習や六次産業化(乳製品)を行っている農家を講師に招き実習を行った。	・マーケティングや六次産業化(牛乳・乳製品、牛肉)に関する校外学習を実施する。
豚鶏	・六次産業化(豚肉、鶏卵肉)を実践している農場見学(校外学習)を行う。	・六次産業化(豚肉鶏肉)をテーマとして校外学習を行った。	・マーケティングや六次産業化(豚肉、鶏卵肉)に関する校外学習を実施する。

目標2-1-2 専攻実習等を通じた技術・経営力の向上

実習販売等を通じてマーケティングや経営管理能力を向上するための学習活動を推進します。(農学科)

専攻	令和6年度計画	令和6年度実績	令和7年度計画
鉢緑	・実習販売時に得られた売れ筋商品、販売単価、顧客の反応等を分析し、品目担当学生が今後の作付け計画を作成する。	市場出荷や直売データ、実習販売時の顧客の反応を元に、今後の作付け方針案を専攻職員と学生で協議し、作成した。	・実習販売時に得られた売れ筋商品、販売単価、顧客の反応等を分析し、品目担当学生が今後の作付け計画を作成する。
切花	・市場出荷データ、実習販売時の顧客の反応を分析し、適切な出荷時期を検討することで、経営管理向上の学習を行う。	・市場出荷や直売データ、実習販売時の顧客の反応を元に、今後の作付け方針案を検討し、経営に役立てる手法を学んだ。	・市場出荷データ、実習販売時の顧客の反応を分析し、適切な出荷時期を検討することで、経営管理向上の学習を行う。
作物	・模擬経営プランを立てさせ自身の経営収支を算出することで、経営に関する意識付けを行う。	・後継者の学生は親元、それ以外の学生は派遣先の農家等を参考に模擬経営プランを立てさせ、経営について意識づけを行った。	模擬経営プランを立てさせ自身の経営収支を算出することで、経営に関する意識付けを行う。
果樹	・ブルーベリー園の観光農園(狩り園・体験園)実践に向け、課題の抽出、集客計画を学習する。またできる範囲でそれに向けた園・施設の整備に取り組む。	・ブルーベリー観光農園に視察へ行き、経営手法について学んだ。お客がすごしやすいよう遮熱資材の導入、入り口が入りやすいよう施設整備を行った。	ブルーベリー園の観光農園(狩り園・体験園)実践に向け、学生内でブルーベリー狩りを試行的に実施し、課題の抽出と改善案の作成を行う。
露野	・経営管理演習において専攻実習で自分が担当した品目の生産コストを把握し、原価計算をして、本校の標準原価を計算する。	・経営管理演習(9月～1月)において専攻実習で自分が担当した品目の生産コストを把握し、原価計算をして、本校の標準原価を計算した。	・経営管理演習において専攻実習で自分が担当した品目の生産コストを把握し、原価計算をして、本校の標準原価を計算させる。 ・校内でイチゴ狩り園を試行し、経営手法を学習させる。
施野	・実習販売において学生自らが販売品目の特徴を説明することでPR能力を高めるとともに、顧客の反応を分析して出荷調整の改善に反映させる。	・実習販売で学生自ら販売品目の特徴を説明した。また、顧客に対して、高糖度トマトやカラムニートマトの食味調査を行い、結果を学生のプロジェクトのテーマや出荷調整に活用した。	実習販売において学生自らが販売品目の特徴を説明したり、食味試験を行うことで農産物の魅力をPRする。
酪農	・出荷に向けた品質向上の取組と出荷結果(収入)の関係を把握し、経営管理につなげる学習を行う。	・出荷に向けた品質向上の取組と出荷結果(収入)の関係を把握し、経営管理につなげる学習を行った。また、外部講師を招き、HACCP研修を実施した。	・出荷に向けた品質向上の取組と出荷結果(収入)の関係を把握し、経営管理につなげる学習を行う。
豚鶏	・出荷に向けた品質向上の取組と出荷結果(収入)の関係を把握し、経営管理につなげる学習を行う。	・出荷に向けた品質向上の取組と出荷結果(収入)の関係を把握し、経営管理につなげる学習を行った。また、外部講師を招き、HACCP研修を実施した。	・出荷に向けた品質向上の取組と出荷結果(収入)の関係を把握し、経営管理につなげる学習を行う。

目標2-1-4 高度な教育環境の整備

メーカー等と連携し先進的な機器や技術の実習指導を実施します。(農学科)

専攻	令和6年度計画	令和6年度実績	令和7年度計画
鉢緑	・専攻実習や校外学習で機器メーカー技術者、生産者等からICT技術の活用方法について学ぶ。	・ICT関連機器、スマート農業資材を導入、設置してプロジェクト課題を設定し、高品質生産技術について学んだ。	・専攻実習や校外学習で機器メーカー技術者、生産者等からICT技術の活用方法について学ぶ。
切花	・専攻実習や校外学習で機器メーカー技術者、生産者等からICT技術の活用方法について学ぶ。	・専攻に導入したICT関連機器を活用している先進農家を校外学習で訪問し、活用方法を学んだ(11月)。	・専攻実習や校外学習で機器メーカー技術者、生産者等からICT技術の活用方法について学ぶ。
作物	・直進アシスト田植機を活用し、先端技術に触れる機会を設ける。また、可変施肥をプロジェクト研究に取り入れる。	・専攻の学生を中心に直進アシスト機能の田植え機で田植えを行い、最新技術の使い方を学んだ。また、可変施肥をプロジェクト研究として取り入れ、可変施肥の利点を含めて特性について学ぶことができた。	インターネットクラウドを利用した営農・サービス支援システム「KSAS」を導入し、ほ場管理、栽培管理等の記録を共有し、学生のプロジェクト実施の一助とする。
果樹	・インターネットクラウドを利用した営農・サービス支援システム「KSAS」を導入し、ほ場管理、栽培管理等の記録を共有し、職員・学生の技術力向上と、学生のプロジェクト実施の一助とする。	・システムの概要や記入方法を学生に指導し、栽培管理の内容を記録させた。記録を基に今作の反省と次作に向けた栽培計画作成について学ぶことができた。	インターネットクラウドを利用した営農・サービス支援システム「KSAS」を導入し、ほ場管理、栽培管理等の記録を共有し、職員・学生の技術力向上と、学生のプロジェクト実施の一助とする。
露野	・イチゴ栽培において日射センサーを用いた日射比例灌水を行い、その理論等を学習する。	・日射比例灌水の講義を11月15日に、11月18日から学生がデータ測定を開始した。	・直進アシスト機能を備えたGPSトラクタの操作方法を学習させる。 ・イチゴ栽培において日射センサーを用いた日射比例灌水を行い、その理論等を学習させる。
施野	・スマートフォンを用いたリアルタイムな生産環境の把握や環境制御機器に触れることで、機器の操作方法や環境制御について学習する。	・あぐりログを利用して、施設内環境データをスマホで把握させた。また、環境制御機器(プロファーム等)の操作方法を学習させ、施設内に植物の生育に適した温度や炭酸ガス濃度等に制御する手法を学習させた。	スマートフォンを用いたリアルタイムな生産環境の把握や環境制御機器を扱うことで、機器の操作方法や環境制御について学習させる。
酪農	・メーカーと協力して、DelProシステムを活用・連携した営農管理システムや飼養管理技術について学ぶ。 ・牛温計、超音波診断装置、クールエアシステム等を活用し、繁殖管理の効率化を学ぶ。	・DelProシステムを活用・連携した営農管理システムや飼養管理技術、牛温計、超音波診断装置、クールエアシステム等を活用し、飼養管理の効率化を学んだ。	・メーカーと協力して、DelProシステムを活用・連携した営農管理システムや飼養管理技術について学ぶ。 ・牛温計、超音波診断装置、クールエアシステム等を活用し、繁殖管理の効率化を学ぶ。
豚鶏	・養豚及び養鶏の先進機器の機能について学ぶ。	・専攻実習で使用している機器について、向上した機能の活用について学んだ。	・養豚及び養鶏の先進機器の機能、豚熱防疫対策、新しいケージシステムについて学ぶ。